

2021 年度日本都市計画学会九州支部シンポジウム

「ウォーカブルで居心地の良い都市空間とは～ポストコロナを見据えた戦略～」

内田 晃 北九州市立大学

1. はじめに

九州支部ではウォーカブルで居心地の良い都市を形成するための国の制度について学び、歩行者の視点で都市空間づくりの戦略をどう考えるかについて議論することを目的としたシンポジウム「ウォーカブルで居心地の良い都市空間とは～ポストコロナを見据えた戦略～」を2022年2月21日(月)に対面+オンラインのハイブリッド方式で開催し、約60名の参加を頂いた。

2. 基調講演

国の制度について国土交通省九州地方整備局のお二方からご講演頂いた。まず松田純一氏(建政部・都市調整官)からは『「居心地が良く歩きたくなる」まちなかづくり』と題して、国が提供している様々な支援メニューの紹介やウォーカブル推進都市の全国の指定状況などをご紹介頂き、賑わい空間づくりのビジョンを取り組む方々が共有することの重要性をご指摘頂いた。続いて佐伯康夫氏(道路部道路計画第二課・課長)からは『「歩行者利便増進道路」; (通称:ほこみち) 制度について』と題して、まず道路政策ビジョン「2040年、道路の景色が変わる」について、続けてほこみち制度の概要や運用状況について、さらにはコロナで影響を受ける飲食店等を支援するためのコロナ占用特例などについてご紹介頂いた。

3. パネルディスカッション

◆パネラー (敬称略)

渡辺一正 (宇部市中心市街地にぎわい創出推進グループ)
酒井伸二 (熊本市都市建設局市街地整備課)
松浦健治郎 (千葉大学大学院)
吉武哲信 (九州工業大学大学院)

◆コーディネーター 内田晃 (北九州市立大学)

まずウォーカブル施策を展開している2都市から話題提供を頂いた。山口県宇部市の渡辺氏は「点の議論から面の議論へ」という視点で目抜き通りをウォーカブル空間へ転換していく経緯、歩道や側道に雑貨屋台や遊具を配置したイベントの事例やその効果を紹介するとともに、車道から歩行者のアクティビティをいかに見せるかが重要であると指摘した。熊本市の酒井氏はバスターミナルを核とした複合施設の再開発事業を契機として整備されたシンボリックな広場と熊本城へ続く新たな都市軸の再デザインの取組事例を紹介し、歩行者空間化と併せた防災機能の強化や駐車場の適正化の必要性を論じた。千葉大学の松浦氏は全米都市交通担当者協会による「アーバンストリート・デザインガイド」を引用し、道路空間は最大のパブリックスペースであること、安全・環境・健康など多面的な側面を重視すべきこと、アクション試行で実験的に少しずつ実践していくことなどの留意点を説明した。また千葉県佐倉市での住民側からのボトムアップ型アプローチによる空間づくりの事例を紹介した。九州工業大学の吉武氏はウォーカブル推進都市に名乗りを上げて推進事業を実施している都市やウォーカブル区域が未設定の都市はまだ多い状況を示すとともに、事業内容としては地域生活基盤施設(広場や情報版)が多いことを紹介した。

ウォーカブル施策推進の上での今後の課題として、特効薬はないがステークホルダーの方々と膝を突き合わせた議論の継続が重要であること(宇部市)、地域のやる気を促すための仕掛けづくりが求められることと事業化している場所の実際のにぎわい創出を見せることが重要であること(熊本市)などの視点が出された。また市役所の若手職員がリノベーションまちづくりを先導(佐倉市)、ウォーカブル施策に関心を持っている道守(大分市)や建築士会(宮崎

市)などによる活動など、様々な関係者による後押しが大事であるという議論があった。今後、様々な地域でウォーカブルな都市空間づくりが進展していくことを期待したい。

